

スマイル会(レジュメ)

日 時： 2012年5月9日(水)12:30~15:00
会 場： 俱進会

『日本の出版物を海外へ — 著作権輸出への道』

(株)日本著作権輸出センター
創業者・相談役 栗田明子

1. 自己紹介

1952年(昭27年) 甲南高校卒
1952-1958 (昭27年~33年) 伊藤忠商事大阪本社 外国部
1959(昭34年) 上京
1959-1960(昭34年~昭和35年) 船会社 Henderson Trippe (英文速記秘書)
1960-62(昭35年~37年) 外資系鉄鋼商社 Philipp Brothers (— “ —)
1963-70(昭38年~45年) タイム社日本支社 (— ” —)
1970-71(昭45年~46年) アメリカ、ヨーロッパで「日本の著作物を海外に紹介する可能性を探る」
旅
1972-80 (昭47~55年) 日本ユニ・エージェンシーで 海外作品の翻訳権売買・共同出版 担当
1981-83(昭56年~昭58年) (有) 栗田板東事務所設立 ケルンを本拠に欧米出版社めぐり
1984-2007(昭59年~平19年) (株) 日本著作権輸出センターに改組 ロンドンに移転
この間、日本の出版物という種を蒔き、欧米出版社めぐり、それが芽生えて、世界の40ヶ国に
広がり、2007年の退任時13,000作品の契約管理に至る。
(アジアの「著作権地図」の変更により、1990年ごろ、入超から出超に)
2007年 後継者に後を託し、会長から相談役に就任、現在に至る。
1997年 フランス文化省からシュバリエ(騎士)賞叙勲

2. 日本の図書が海外に渡るには

- ・ボローニャ国際児童図書展やフランクフルト国際図書展に出展「合同スタンド」設置
- ・30分ごとの編集者との約束を取り付けて売り込む
- ・来場者がめぼしい本を見つける
- ・いかに編集者の興味を引き出すか
- ・どうしても売り込みたい本は、図書展で持ち歩くか、直接出版社を訪問する
- ・ヴィジュアルな本は、同じ本各国語版を共同で印刷、製作する考えかたが、ヨーロッパ圏内では当たり前(円高の現在は、尚更必要な措置)
- ・現地エージェントとの協力体制を確立すること

3. 日本と海外出版界との違い

- ・主として流通が異なり、編集と営業の意識も異なる
- ・オーナーズ・エージェントになり得ない日本の海外向け著作権エージェント
- ・文化の違いを調整しなくてはならないこともある(実例)

4. 翻訳者の問題点

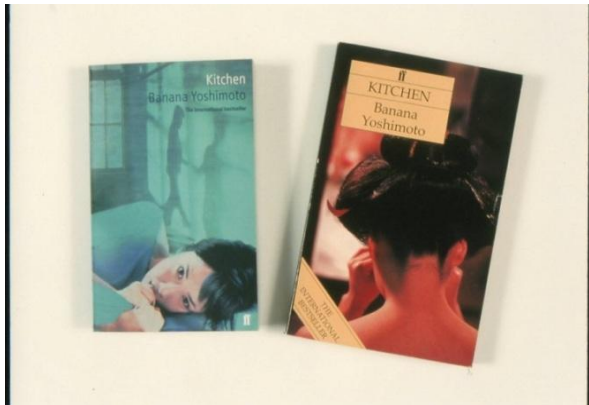
- ・距離の置き方(協力の仕方、され方。熱心さ=実力ではない)
- ・実例：吉村昭(英語)、小川洋子(フランス語、英語、ドイツ語)、よしもとばなな(英語、イタリア語)、村上春樹(英語)、星新一(英語)など

5. 日本の文芸書のプロモーション（理想的な援助のあり方を探る）

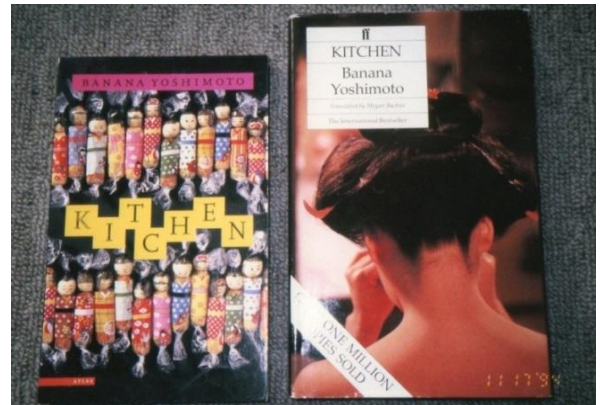
- ・日本ペンクラブ（遠藤周作会長のときに受けた要請）
- ・文化庁（選者、翻訳費、完本買い上げ、四言語のみ、入札制など問題点）
- ・国際交流基金（JBN、翻訳援助）

6. 出版文化交流の本質と出版の未来を考える

- ・息の長い国策の必要性



1. 「キッチン」中国（左）・イギリス（右）



2. 「キッチン」オランダ（左）・イギリス（右）



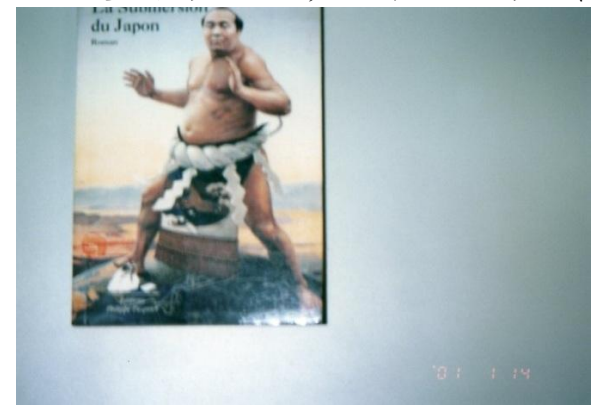
3. 「キッチン」ドイツ（左）・フランス（右）



4. 左からアメリカ・スウェーデン・ギリシャ



5. 「キッチン」クロアチア



6. 「日本沈没」フランス

付記

本の出版：

- ・『アメリカの出版界 - ハーパー社の出版経営』赤石正と共著 出版同人 (1974)
- ・『オーディオ方式英文速記入門』研究社出版 (1976)
- ・『ゆめの宝石箱』国土社 (1986)
- ・絵本『ゆうびんきょくいんねこ』ゲイル・ヘイリー作の翻訳 (筆名 あしのあき) ほるぷ出版 (1980)
- ・『20世紀のすてきな女性達 (6) バリアを超えて』共著 岩崎書店(2000)
- ・『海の向こうに本を届ける - 著作権輸出への道』晶文社 (2012)

講演会

- ・『ひろしまのピカ』が海を渡ったとき - 日本の絵本の翻訳出版に携わって (2010.3.6.)
於・国際子ども図書館
- ・『ひろしまのピカ』(丸木俊・位里作)が海を渡ったとき (2011.8.6.)於・原爆の図 丸木美術館・ひろしま忌イベント
- ・『海を渡った日本の本たち - 日本の絵本の翻訳出版に携わって』(2011.10.22.)
於・天理市立図書館

出版記念会：『ゆめの宝石箱』(1986年6月 於・出版クラブ)

『海の向こうに本を届ける』(2012年3月 於・教文館ウェンライトホール)

マスコミ報道：

- ・新文化「栗田明子氏が回想録上梓 晶文社『海の向こうに本を届ける』日本文学、海外に紹介したいと一念発起」 2011.12.01, 芦原真千子
- ・サンデー毎日 「出会いがもたらした一万三千の物語」 2011.12.11.古屋美登里
- ・中日・東京新聞「自著を語る」栗田明子さん「手がかかるほど深い愛着」 2011.12.06.
- ・読売新聞 書評欄よみうり堂「海の向こうに本を届ける」 2012.01.08 尾崎真理子
- ・読書人「ココロを輸出しよう ～鞆ひとつの奮闘記～」 2012.01.13 鷲尾賢也
- ・朝日新聞 「著者に会いたい」出版は志“の言葉を胸に” 2012.01.15.大上朝美
- ・図書新聞 「ポートレート 『海の向こうに本を届ける』を出版した栗田明子氏」
「日本の本とともに世界へ」 2012.02.11.
- ・北海道新聞 訪問「海の向こうに本を届ける」を書いた栗田明子さん 「日本の作品私がやるしか」
2012.2.12 関正喜
- ・婦人公論「海の向こうに本を届ける - 北杜夫や小川洋子など日本の文芸書に
寄り添い続けて」 2012年3月号 仲俣
- ・図書館会報 **モルゲン** 「「本を届ける人」にこの本こそ届けたい」 2012年3月号
大江輝行
- ・神保町の匠 「海外での翻訳出版に賭けた先駆者のドラマティックな記録」 2012年
3月 野上暁
- ・「毎日が発見」「人生悠々 ニッポンの”本を行商“し、文化交流の発展に尽くす」角川マガジズ 2012
年4月号 pp114-117 川島敦子
- ・新文化「著作権輸出の草分け 栗田明子さんの出版記念会」 2012.3.22
- ・週刊ポスト ポスト・ブック・レビュー 「著者に訊け！」栗田明子「この国はモノの輸出は後押しして
いたけれど、文化に関してはほぼ無策です」
構成/橋本紀子 2012.4.27.

ご質問への回答：

例会で、日本の条約加盟の年についてのご質問を受けましたが、即答できませんでしたので、次の通りご回答いたします。

日本が万国著作権条約に加盟したのは、1956年4月28日です。しかし、条約というのは、「相互に守るもの」ですから、条約に、加盟しても相手国で対応が変わってきます。戦争相手は「戦次加算」があり、その都度それが何年かを調べる必要があります。たとえば、旧連合国のアメリカの場合は三つの時代に分かれます。戦前は日米二国間条約、戦後は日米暫定協定、万国著作権条約・ベルヌ条約の時代と、複雑な経緯を経ています。日本のベルヌ条約加盟は1899年(明治32年)です。明治政府が徳川政権の結んだ不平等条約を改正させるため努力し、この外交交渉の中で改正の引き換え条件としてベルヌ条約加盟が強要されました。イギリスの圧力が大きかった由です。(著作権に詳しい宮田昇氏は著作権を尊重するという意識ではなく、先進国に肩を並べたい、文明国であることを強調したいという意識からではなかったかと考えております。)

いずれにせよ、条約別、相手国別の細かい知識が必要なので、ここでは、参考になる図書のご紹介に止めさせていただきます。

- ・『新版 翻訳出版の実務』宮田昇著 日本エディタースクール刊(1989)
- ・『翻訳権の戦後史』宮田昇著 みすず書房刊(1999)
- ・『著作権事典 改訂版』著作権資料協会編 出版ニュース社刊(1985)

著作権の状況も刻々変わりますから(無条約国が新規加盟するなど)、新しい情報を参照してください。

「10年留保」の特令(アメリカで原書発行後10年以内に翻訳出版がなされていなければ、無断で日本語訳で出版が許される特例、但しカナダで同時刊行されていれば無断で出版できない)のことをお話ししましたが、1970年12月31日までに出版された場合まで適用になり、それ以降の特令は廃止されました。(日本が先進国の仲間入りをしたという証しでしょう。) 以上